

佐賀県立博物館報 №.48

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947



湖 畔

私(照子夫人)の23歳の時で、良人が湖畔で制作しているのを見に行きますと、其処の石に腰かけてみてくれと申しますので、そう致しますと、よし明日からそれを勉強するぞと申しました。そこで翌日の午後4時頃から始めました。——照子夫人の言葉

この絵は、明治30年の夏、避暑のため箱根に滞在したときのものであるが、夫人をモデルに描いたこのときのさりげない構図も、画面の後景へとしっかりと深まっていく日本的な遠近感の向こうには、明治23年のバリーの黒田のモチーフがあった。

「……そのゑはてほん二ってくれるやつがなつのきものでうちわをもつてにハニたつてをるところです(後略)明治23年10月16附 グレー発信 (1897年、油彩・カンヴァス、69.0×84.7)

目 次

●湖 畔	1
●開催要項・黒田清輝像	2
●出品作品	3～4
●出品目録	5
●黒田清輝と近代日本洋画のある一面	6
●佐賀県内所在博物館・美術館等施設	7
●行事のお知らせ・人事異動	8

黒田清輝展開催要項

名称：近代日本洋画の巨匠——黒田清輝展

会期：昭和55年5月17日(土)～6月8日(日)

(休館日 5月19日、26日、6月2日)

主催：東京国立文化財研究所、佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館

観覧料：

	個人	団体 (20名以上)
大人	400円	300円
大・高生	200円	150円
中・小生	100円	50円

講演会：日時 5月25日(日)午後2時より

場所 大展示室

講演者 陰里鉄郎

(東京国立文化財研究所美術部主任研究官)

演題 「黒田清輝と近代日本洋画」

会場：佐賀県立博物館

(佐賀市城内一丁目15-23 Tel 0952043947)

主旨：黒田清輝(1866～1924)は鹿児島に生まれ、18歳でフランスに渡り、はじめ法律研究をめざしたが、のち洋画研究に専念し、明治中期のわが国洋画界に明るい色調による斬新な画風をもたらした。

帰国後は、明治29年に開設された東京美術学校西洋画科の初代教授となったのをはじめ、国民美術協会会頭、帝国美術院長などの要職にあって、晩年まで美術界の中心的な役割を果たしている。

今回の展覧会は、この黒田の遺志により昭和5年に創設された帝国美術院付属美術研究所をその前身とする、東京国立文化財研究所の黒田関係所蔵品のなかから、油彩、デッサン、スケッチ等141点を公開展示するものである。

黒田の初期から晩年に至る画業が一望できるこの展覧会とおして、あらためて近代日本洋画史上の彼の業績を回顧する機会を提供するとともに、あわせて県民の文化向上の一助とするものである。

展示内容：油絵・パステル 60点(昼寝、赤髪の少女、湖畔、他)
木炭デッサン 50点
写生帖 17点 書簡 3通
日記 5点
参考出品 6点(高村光太郎作「黒田清輝像」遺品、他)

合計 141点

黒田清輝像 高村光太郎作 一九三二

氏(黒田)は趣味を生命とする画家である。……氏の芸術に対する理解は割合に簡単であるが、其の情緒は至醇である。自然の見方は鋭くも強くもないが要領を得ている。——高村光太郎「文部省美術展覧会第二部私見」明治四十四年





16. 編物する女(木炭デッサン) 1890頃

わたしがたのんでほんにしてをるおんなといふのはとしはまだ十九か二十ぐらいだそうですがせいのたかいことまことにふしぎにてほんとうのつぼでございませぬ。わたしはようやくそのおんなのかたのたかさぐらいきりやございませぬよ——黒田清輝「1890(明治23)年7月12日附、パリ発信、母宛」

14. 枯れ野原(グレー) 1891頃

此頃ハ全ク秋にて景色もよろしく候 御地の景色さぞかしと思ひ麗在候 霜も度々置き候 今尚一月位ハ是非當地にて勉学仕度考に御座候——黒田清輝「1890(明治23)年10月24日附、グレー発信、父宛」



3. 裸体・女(後半身) 1889

このごろハ髪の大がくこのうこうしゃくをきにしゆうかんに二どづゝいきます。ひとのほねぐみやまたにくやすちなどのおはなしにてまことにおもしろいこととございませぬ。ほんとうのひとのしがいをそこにすゑてをいていてそうしてにくなどをひっぱりだしてこうしゃくするのですからなかなかよくわかります——黒田清輝「1889(明治22)年1月17日附、パリ発信、母宛」





21. 昼寝 1894 (上図)

庭の中で黒田さんと二人して百姓娘を描いたが、これが私(岡田三郎助)の人物野外写生のはじめで、たまたま百姓娘の姿の上に刻々として光線が遷って行くため、二人は何度も何度も画架をうつして怖ろしい苦心を重ねたものである。——岡田三郎助「アトリエ雑話」



28. 昔語り下絵 舞妓 1896 (右図)

人間は神様でないから一々写生して、それからそれを画師の考へ次第に直していかなければ、立派な絵は書けない。それを誰もやらない、目くらへびのたとへのようなものだろうと思ひます。——黒田清輝「名流談海」



57. 梅林 1924

清輝、1924(大正13)年7月15日午前4時15分逝去。享年58歳。

出 品 目 録

油彩・パステル

No.	作 品 名	制作年	大 き き
1	横図(羊飼に天女)	1887	33.5×47.2
2	田 舎 家	1888	42.3×54.3
3	裸体・女(後半身)	1889	60.3×50.5
4	裸体・女(全身)	〃	81.6×44.7
5	裸体・女(全身)	〃	79.0×54.5
6	裸体・男(半身)	〃	60.0×43.9
7	自画像(トルコ帽)	〃	40.5×30.7
8	祈	〃	74.0×53.7
9	画 室 の 一 隅	〃	54.6×45.6
10	原	〃	38.0×46.0
11	羊を抱く少女	〃	26.3×20.8
12	バリー風景	1890	40.5×27.7
13	少 女 の 顔	〃	25.0×19.9
14	枯れ野原(グレー)	1891頃	43.9×65.0
15	編 物	1891	48.7×59.7
16	風景(グレー)	1892頃	24.0×35.5
17	残 雪	〃	47.5×37.5
18	赤髪少女	1892	86.3×68.0
19	ブレハの海岸	〃	38.7×64.0
20	横浜本牧の景	1894	24.5×33.0
21	昼 寝	〃	49.8×61.0
22	昔語り下絵(横図II)	1896	41.1×63.3
23	昔語り下絵(草かり女)	〃	59.8×44.1
24	昔語り下絵(僧)	〃	78.8×42.3
25	昔語り下絵(舞妓)	〃	94.4×46.8
26	昔語り下絵(仲店)	〃	93.8×47.6
27	昔語り下絵(男)	〃	93.8×47.6
28	昔語り下絵(舞妓)	〃	93.2×46.0
29	昔語り下絵(男と舞妓)	〃	78.0×51.5
30	昔語り下絵(清閑寺景)	〃	29.7×48.8
31	昔語り下絵(清閑寺門)	〃	35.6×26.4
32	母 子	1897	36.6×29.0
33	犬	〃	23.0×33.2
34	漁 舟 着 岸	〃	27.7×38.0
35	湖 畔	〃	69.0×84.7
36	書 見	1898	59.0×40.5
37	香 港	1900	32.7×23.5
38	花 野 下 絵	1907	33.5×46.0
39	桂公肖像(画稿)	1910	61.2×50.7
40	婦 人 肖 像	1911-12	65.8×50.4
41	森の中(パステル)	〃	40.2×15.1
42	雲(6枚入)	1913	〃
43	もるる日影	1914	53.2×45.8
44	農 婦	〃	60.5×45.5
45	花 野	1907-15	126.5×181.2
46	鎌倉にて(3枚)	1915-18	各14.0×18.0
47	温 室 花 壇	1919	44.3×59.4
48	嵐	〃	26.3×34.1
49	夕の梨畑(3枚入)	〃	13.6×18.0
50	寒 山 子	1920	27.5×35.3
51	つ っ ち	1921	26.7×35.2
52	山 っ ち	〃	28.0×35.8
53	稲 荷 神 社	1922	〃
54	雪	〃	33.0×45.4
55	薔 薇	1923	33.9×28.0
56	樹 芳 園	〃	26.1×35.0
57	櫻 林	1924	26.7×35.0
58	林(絶筆)	〃	79.0×66.7
59	薔 薇	〃	27.8×35.5
60	しゃくなげ	〃	27.3×35.5

木炭デッサン

No.	作 品 名	制作年	大 き き
1	自 画 像	1885	27.3×22.7
2	女の顔(模写)	1886	62.5×47.5
3	石 膏 像	1887	63.0×47.0
4	裸 婦 習 作	〃	63.0×47.2
5	裸 体 習 作	〃	63.0×47.0
6	裸 婦 習 作	1888	62.5×47.3
7	裸 体 習 作	〃	63.0×47.0
8	裸 体 習 作	〃	63.0×47.0
9	少 年	〃	63.2×47.0
10	裸 婦 習 作	〃	63.2×47.0
11	裸 体 習 作	1889	62.5×47.0
12	女 の 顔	〃	62.5×47.0
13	椅子による女	〃	62.5×47.5
14	裸 婦 習 作	1890	63.0×47.0
15	雑物する女	1890頃	62.5×47.5
16	編物する女	〃	62.5×47.5
17	机による女	〃	63.0×47.0
18	女 の 顔	〃	63.0×47.0
19	雪 景	〃	62.5×47.5
20	夏图画稿(傘持つ女)	1892	47.0×29.0
21	夏图画稿(傘持つ女)	〃	48.0×32.0
22	夏图画稿(女の顔)	〃	38.5×26.5
23	夏图画稿(手)	〃	36.0×28.0
24	夏图画稿(女の顔)	〃	47.5×31.5
25	夏图画稿(手)	〃	48.0×32.0
26	夏图画稿(女の顔)	〃	31.0×48.0
27	夏图画稿(手)	〃	31.0×48.0
28	夏图画稿(坐る女)	〃	31.0×47.0
29	夏图画稿(坐る女)	〃	31.0×48.0
30	夏图画稿(横たわる女)	〃	29.5×46.0
31	夏图画稿(坐る女)	〃	29.5×35.0
32	昔語り図画稿(横図)	1896	63.0×47.0
33	昔語り図画稿(手)	〃	63.0×47.0
34	昔語り図画稿(舞妓半身像)	〃	63.0×47.0
35	昔語り図画稿(男着衣半身像)	〃	63.0×47.0
36	昔語り図画稿(男の脚)	〃	63.0×47.0
37	昔語り図画稿(手)	〃	63.0×47.0
38	昔語り図画稿(男裸体半身像)	〃	63.0×47.0
39	昔語り図画稿(仲居全身像)	〃	63.0×47.0
40	昔語り図画稿(仲居半身像)	〃	63.0×47.0
41	昔語り図画稿(舞妓全身像)	〃	63.0×47.0
42	昔語り図画稿(舞妓半身像)	〃	63.0×47.0
43	昔語り図画稿(僧半身像)	〃	63.0×47.0
44	昔語り図画稿(僧の手)	〃	63.0×47.0
45	昔語り図画稿(草刈り娘全身像)	〃	63.0×47.0
46	昔語り図画稿(草刈り娘の足)	〃	63.0×47.0
47	昔語り図画稿(僧の足)	〃	63.0×47.0
48	昔語り図画稿(草刈り娘の顔)	〃	63.0×47.0
49	婦 人 肖 像	1898	63.2×47.3
50	花 野 図 画 稿	1907頃	63.0×47.0

参 考 資 料

写 生 帖 17点(1887-1895年)
書 簡 3通(黒田清綱宛)
日 記 5点

参 考 出 品

6点
高村光太郎作 黒田清輝像(ブロンズ)
遺 品 画室用イーゼルと椅子、絵具箱
写 真 パ ネ ル (朝服朝、昔語り)他記録写真

黒田清輝と近代日本洋画のある一面

黒田清輝が明治25年(1892)6月3日、パリ近郊のロアン河畔の小村グレーから、父に宛てた手紙の中に、黒田が今後自ら取るべき道と為したものを暗示する一文がある。

それは、「日本と佛蘭西と油畫の上手へも大抵額の大小の差の位の者かと被察申候」と言った言葉で、これは、この同じ年の3月の明治美術会第4回展への参考出品となった「読書」(1890~91年、油彩、99.0×80.2cm)が評判も良く、またその額(絵)の大きさが評判をとったことを知り、それに対する感想であった。

この作品は前の年の明治24年3月、画面に「源清輝寫」と記名し、ソシエテ・デザルティスト・フランセのサロンに出品、入選したもので、サロンに入選した日本人としては3人目であった。

このとき黒田が、自分の絵は「當地の共進會にては小さ過ぎるの目ニハ付き難き方」と思ったことが、先の考えとなったのであろう。

そして反面、これはまた、パリのサロンで入選を果たした黒田が、さらに飛躍を計り、一層大きな絵に取り組もうとした自信を我々が窺い知り得る言葉でもあった。

彼の特徴的な滞欧日記には、自分の絵についての希望のふくらみと不安とが交錯して語らる。

黒田は明治20年パリで哲学者の井上哲次郎に出会い、これをきっかけとしてそれまで二股にして学んでいた法律学を断然止めることを決心した。法律学の知力を手だてに絵画における精神性を高めることの愚かさを知らされたからであった。

絵画が学問中最も高尚なるものであるという考えは、ルーブル美術館等での巨匠の作品を模写することで一層強められたであろうが、彼は、実際、具体的には、彼の師ラファエル・コランのおぼろげで曖昧な精神性に就くこととなった。

「先ず私の教師の畫を見ても春と云様なる題にて草花の咲き出て居る中ニ丸はだかの美人がねて居りながら何ニ心なく草葉を取りて口ニくわへたる様をかき……」と父宛に書き送ったのは明治23年4月17日であった。

黒田のフランスでの絵画修業の仕方は、ひとつは、「むかしのひとつのかいた糸をうつつ」ことであり、他のひとつは、「いなかについてべんきようする」ことであった。前者が、西洋の古典美術、とくに北方のレンブラントを学び、後者が、ミレーあるいは印象派の作画態度を学ぶことであった。

しかし、彼が身に付けたものは、コラン流の穏やかな作風の趣味的絵画であり、それが生来、彼の性向に合っていたのもであったろう。

黒田は、明治26年6月14日の帰国にあたり、日記に、戯れにか、「朝10時20分の氣車で巴里を立つ、とうとうオレの命が之でできて仕舞ニけりだ」と記した。

彼が「源清輝」と記して2年、彼は西洋の絵画における大きさとそこにこめられた意味に到ることが出来なかったのである。

この年の7月黒田は帰着したが、同じ月に彼が兄弟のように付き合った学友久米桂一郎(1866~1934)が帰国した。翌年久米の紹介で岡田三郎助(1869~1939)が黒田を知ることになる。この三人の出会いこそが、当時の日本の洋画壇に新たな潮流を引き込むことになり、それ以後の日本の洋画史における主導と反発を生み出していくのである。

こうした中で、黒田が一生を俟って求めようとしたものは、岡田の中でより明確に日本化された形をとって顕われるように思われる。それは、黒田がいうように、岡田が、最もコランを受け継いで、形よりも色において勝れ、色に対してはデリケートな感覚をもっていたからというのではなく、むしろ、「岡田君は初めから斯う云う畫を描こうと考えて掛かって、そしてそれがさう言う畫になる様」(美術新報10-6)な岡田の絵画理想への傾きに見るのである。ましてや黒田が、初めから、こう言う畫を描こうと思ったことはなく描いている中にさう言う畫が出来るような性情をもっていたとするならば、晩年の彼の中庭的絵画世界に比べ、岡田の後半性に至るまでの裝飾的絵画世界は、ひとつ西洋を捉えていたとは言えないだろうか。

久米は、帰国した後には、絵画の実作の方面ではしだいに億劫となり、東京美術学校西洋画科で美術解剖学などを講義して壇上の教育者として後進の育成にあたったが、岡田は、まさに黒田、久米の意向を受け継ぐかたちで、自己の絵画の道を切り拓いて行こうとしたのであった。それが、西洋絵画に見る永遠不変の美の表出への意思を、彼の裝飾に過ぎる画面に定着させようとしたところに岡田の絵画の行きつく先があったのである。ただ、その裝飾性を一面化しようとしたとき、彼の晩年の傑作「婦人半身像」(1936年、岩絵具、100.0×72.7)があったのは皮肉でもあった。(松本 誠一)



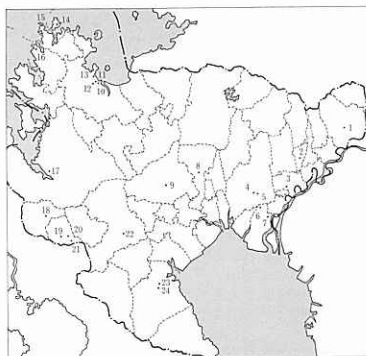
岡田三郎助
婦人半身像(下繪)

一九三六

佐賀県内所在博物館・美術館等施設

- ① 有吉美術館（個人）
〒841 鳥栖市宿町1247-4
TEL (09428) 3-3526
- ② 陸上自衛隊目達原駐屯地史料館（国）
〒842 神埼郡三田川町目達原
TEL (09525) 2-2161広報室
- ③ 下村湖人生家（県）
〒842 神埼郡千代田町崎村字一本松895
TEL (095244) 2111 千代田町教育委員会内保存会
- ④ 佐賀県立博物館（県立）
〒840 佐賀市内1丁目15の23
TEL (0952) 24-3947
- ⑤ 大隈記念館（市立）
〒840 佐賀市水ヶ江2の11
TEL (0952) 23-2891
- ⑥ 佐賀県農業試験場農民会館（県）
〒840-23 佐賀郡川副町南里1088
TEL (09524) 5-2141 経営研究室
- ⑦ 佐野常民記念館（町立）
〒840-22 佐賀郡川副町早津江津398
TEL (09524) 5-4173
- ⑧ 小城町文化財収蔵庫（町立）
〒845 小城市小城町本町
TEL (09527) 3-2111内線67
- ⑨ 多久市郷土資料館（市立）
〒846 多久市多久町1975
TEL
- ⑩ 唐津城天守閣（市立）
〒847 唐津市東城内8-1
TEL (09557) 2-5697
- ⑪ 唐津曳山展示場（市立）
〒847 唐津市西城内6-33
TEL (09557) 2-8278 文化会館内
- ⑫ 小笠原記念館（市立）
〒847 唐津市西寺町511 近松寺境内
TEL (09557) 2-3597
- ⑬ 唐津市歴史民俗資料館（市立）
〒847 唐津市海岸通り
TEL (09557) 4-8374
- ⑭ 呼子町歴史民俗資料館（町立）
〒847-03 東松浦郡呼子町加部島
TEL (09558) 2-3001 呼子町教育委員会
- ⑮ 波戸岬ビジターセンター（県）
〒847-04 東松浦郡鎮西町波戸
TEL (09558) 2-1600
- ⑯ 玄海原子力展示館（会社）
〒847-14 東松浦郡玄海町今村
TEL (095552) 6409
- ⑰ 伊万里歴史民俗資料館（市立）
〒848 伊万里市松島町73
TEL (09552) 2-7105
- ⑱ 西有田町歴史民俗資料館（町立）
〒849-41 西松浦郡西有田町大木2208-1
TEL (095546) 2111 西有田町教育委員会
- ⑲ 佐賀県立九州陶磁文化館（県立）
〒844 西松浦郡有田町中部字田の平3100-1
TEL (09554) 3-3681
- ⑳ 有田町立有田陶磁美術館（町立）
〒844 西松浦郡有田町3区1356
TEL (09554) 2-3372
- ㉑ 有田町立歴史民俗資料館（町立）
〒844 西松浦郡有田町139-1
TEL (09554) 3-2678
- ㉒ 懸州園美術館（会社）
〒843 武雄市武雄町御船山山麓
TEL (09542) 2-2066
- ㉓ 鹿島市立民俗資料館（市立）
〒849-15 鹿島市古枝1448
TEL (09546) 2-2749 林業センター
- ㉔ 祐徳博物館（宗教）
〒849-15 鹿島市古枝1686 祐徳稲荷神社外苑
TEL (09546) 2-2151 祐徳神社

佐賀県内所在博物館・美術館等施設の分布図



行事のお知らせ

常 設 展		(原則として月曜及び祝日の翌日休館)	
佐賀県の歴史と文化展	4月1日(水)～5月11日(木) 6月15日(木)～9月25日(木) 56年 2月11日(水)～3月31日(水)	大 人 50(30) 大・高生 30(20) 中・小生 20(10)	佐賀県の地質や自然および先史時代から現代にいたる歴史と文化についての、理解を深めるために自然史、考古、歴史、美術工芸、民俗の各部門について、系統的に資料を展覧する。

企 画 展		(原則として月曜休館、月曜祝日の場合は火曜休館)			
展覧会名	会 期	観 覧 料 (内は団体料金)	展覧会名	会 期	観 覧 料 (内は団体料金)
黒田清輝展	5月17日(土)～ 6月8日(日)	大 人 400(300) 大・高生 200(150) 中・小生 100(50)	佐賀県美術展	11月15日(土)～ 11月24日(日)	大 人 200(150) 大・高生 100(70) 中・小生 50(30)
佐賀美術協会展	6月19日(木)～ 6月29日(日)	無 料	佐賀県高等学校芸術祭書道・美術部門展	11月28日(金)～ 12月4日(木)	無 料
七夕書道展	8月1日(金)～ 8月5日(水)	無 料	佐賀県学童美術展	12月11日(木)～ 12月16日(水)	無 料
佐賀県書作家協会展	8月7日(木)～ 8月10日(日)	無 料	書 初 展	1月17日(土)～ 1月21日(水)	無 料
九州新工芸展	8月21日(木)～ 8月31日(日)	無 料	佐賀県勤労者美術展	1月31日(土)～ 2月5日(木)	無 料
理科作品展	市・9月13日(土) ～9月17日(水) 県・9月19日(金) ～9月25日(木)	無 料	九州グラフィックデザイン展	2月10日(水)～ 2月15日(日)	無 料
九州の文化展	10月4日(土)～ 11月3日(日)	大 人 400(300) 大・高生 200(150) 中・小生 100(70)	佐賀大学卒業制作展	2月21日(土)～ 2月25日(水)	無 料

各展示会は都合により変更されることがあります。

※昭和56年1月6日から2月1日まで開催予定の「古伊万里・マイセン磁器名品展」は都合により中止いたします。

○ 人事異動

昭和55年3月31日付

○ 退職

副館長 古野幸雄

昭和55年4月1日付

○ 転入

館長 永原正隆 (議事事務局長より)

副館長 武富雅道 (佐賀県立図書館副館長より)

総務課庶務係主事 中村美沙子 (佐賀保健所環境衛生係主事より)

総務課庶務係主事 山田洋子 (教育庁総務課庶務係主事より)

○ 転出

館長 大塚正道 (佐賀県企画室次長へ)

総務課庶務係主事 野口吉江 (佐賀県立図書館主事へ)

学芸課資料係学芸員 吉永陽三 (佐賀県立九州陶磁文化館学芸員へ)

学芸課普及係主事 山田憲生 (佐賀商業高等学校主事へ)

学芸課普及係主事 武藤いく代 (総務学事課庶務係主事へ)

○ 新採

学芸課企画普及係主事 森永 茂

昭和55年5月1日付

○ 新採

学芸課資料係学芸員補 宇治 章

博物館報 第48号

発行年月日 昭和55年5月15日

編集 永原正隆

発行 佐賀市内1丁目15-23

佐賀県立博物館

印刷 佐賀印刷社